

インビジブルグスク

本部町は三山時代から明との交易の拠点であったと言われ、今日まで長きにわたり、船舶の寄港地として利用されています。その間、波、風、行き交う船や人は絶えず流れ続け、この場所はそれを見守ってきました。ここに新たにつくられる建築も流れゆく時の中でそこに在り続け、利用者を包み込みながら、時間、距離を超えてゆく建築を提案します。



・柱のない大きな屋根に覆われた大空間
要項にある、「荷捌き・貨物の引取及び待機を天候に左右されず安全・快適に行うことのできる屋根付き利便施設」、要求面積の算定方法（コンテナ占有面積と利用者占有面積の合算）から、シンプルに大きな屋根と大空間が必要と考えます。

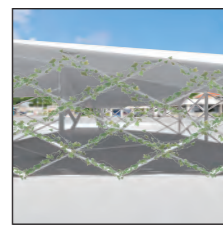
・距離を超える
太陽の光は今も昔も変わらず、この地を照らしています。トップライトから取り込んだ太陽の光が、船乗りたちが目印とした北の方角、旅の目的地である伊江島を指し示します。

・時間を超える
本部町の史跡にアメラグスクというものがあります。アメラグスクは海、船舶の管理監視のため築造されていましたが、今帰仁城が完成したため、途中で放棄されたと言われています。航海をする人々のための施設という意味では、アメラグスクと本建築は似ているかもしれません。つくられることなかったグスクを現代に蘇らせることはできないだろうか。

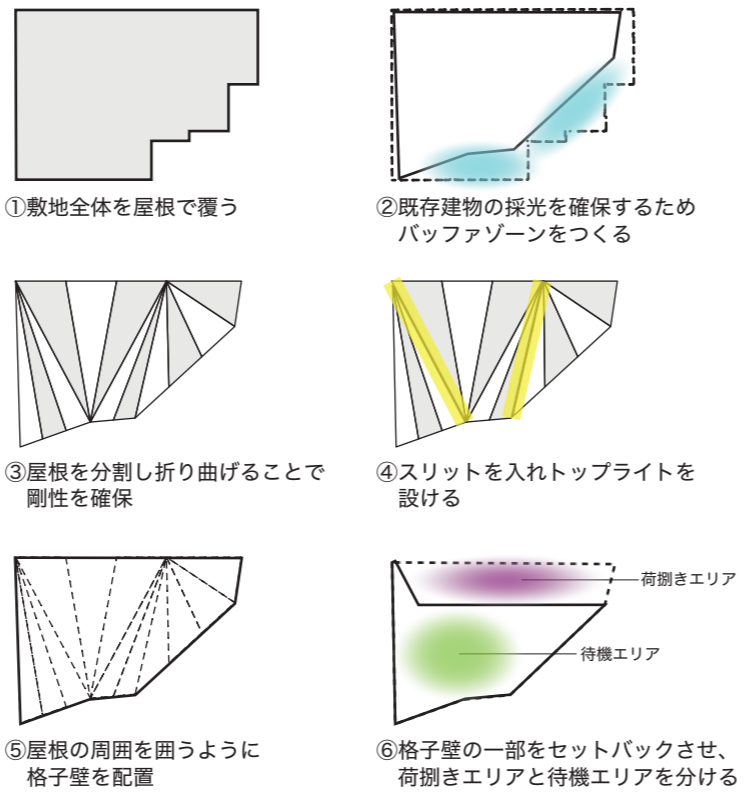
・透明な石垣 - インビジブル -
グスクの石垣には、植物が自生しています。石垣に自生する植物のように、格子の壁に植物を這わせませ。石垣と格子壁はネガとポジ、反転関係にあり、格子壁は透明な石垣となります。格子壁に囲われた空間は、時を超えて、アメラグスクに思いを馳せる場所になるかもしれません。



⇄
反転関係

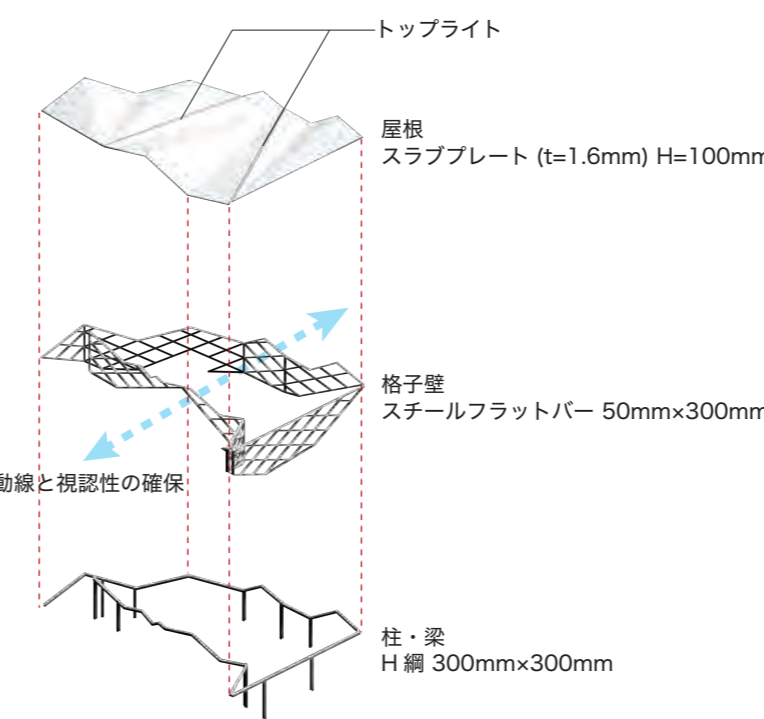


敷地全体を覆う大屋根と空間構成



大屋根を支える格子壁と部材構成

柱のない大空間をつくるため、大屋根の周囲に柱と梁を配置し、屋根全体を格子状の壁で囲います。格子は横4m、高さ2m、見付けを50mm程度とし、視認性を確保します。また、部分的に格子の部材を抜き動線とします。



流れる時間の中で変わらないもの

屋根に2箇所トップライトを設けます。そこから差し込む光は、一つは北の方角を指し、もう一つは伊江島を指します。人、船、波、光、雲、風、絶え間なく流れる時間の中で、変わらないものをこの地に刻みます。

